

一目惚れ

春が来て、目に映る世界がまた変わる。色づき始める景色、心をふわふわ誘う暖かい風、匂い。

何度経験しても、この季節は飽きない。

そして、僕は彼女に一目惚れをした。

「やっほー、こっち見てよ」

彼女の声を初めて聞いたのは、ちょうど1週間前。桜が散り始めたのにも関わらず少し寒い、そんな日だった。一人で目の前に現れた彼女は、このふわふわした季節が似合う、そんな女の子。目が合えば手を振ってくれる、はしゃいでクルクルまわる彼女は危なっかしい。本当はお話できればいいのだけど、と声を出しかけて、笑う彼女を目の前に、また引っ込める。

1週間前に出会って一目惚れ、そして今日再会してまたドキドキした。

春はいたずらだ、こうやって感覚を狂わせる。

「ねえ、名前なんていうの？」

僕の向かいに座る彼女の口が動いた。話しかけられるのは初めてではない、けれどもこちらの返答を待つ会話は初めてだ。

どうして答えればいいのか、戸惑う僕の目の前でまた彼女が笑う。

「名前を名乗るときは、自分からだったね、私は、はるっていうの」  
はる。たった二文字に心が温かくなった。

満足げに髪を梳いたはるは、もう一度こちらを向いた。目が合う。

「で、そちらは…あ、さかぐち？坂口君？」

小首をかしげながらはるはそうたずねた。

どうして通じたんだろうか。いつも僕の言葉は無視される。

口を開けば、ある人は笑い、ある人は喜び、ある人は怖がり。

そんななかで、彼女の反応は飛びぬけて変だった。

「そうだよ。君はどうして笑わないの？ 怖がらないの？」

思わず口をついて出た言葉、やっと話せたと思っただけならこんな言葉しかでてこない。

「だって！！」

はるは何かを言いたげに慌てて立ち上がった。こちらに近づく。

この子はどうしてこんなにも僕に構うのだろうか。みんなのように無視して時々こっちを見て、また通り過ぎればいいだけなのに。

「私、のお友達だから。こんなところにずっと一人で来て。私って変わり者でしょ？だから、あんまり友達とかも居なくて」

少しトーンの下がった声と、一瞬寂しそうな顔をしてまたいつもの表情に戻るはるの顔。可憐でふわふわしているはるだけれども、この瞬間ばかりは、僕には触れられない距離を感じた。

はるが苦しんでいるなら、すぐにでも駆けつけてやりたい、けれどそれは許されるはずもなく。

あれから1ヶ月。まだ寒い日はあるけれど、ずいぶんと暑くなって最近寝苦しい毎日が続く。

毎週末、僕ははると会った。

僕はそんなつもりじゃなかったけど、はるはデートだと言う。本当に変わった子だ。

たくさん話もした。どこかに出かけるなんて普通のデートじゃなくて、いつも向かい合って座って目を合わせて話をする。その繰り返し。

話す内容と言えば、はるの学校のこと、僕の家族のこと、なんの得になるのかも分からないけど、今までの人生で一番有意義に感じた時間。

そんなはるが今日は一人じゃない。友達を連れてきたのだ。

はるが友達といるところをはじめて見た。僕と会うときはいつも一人だから。

「紹介するね、坂口君。実はマイダーリンだったりします」

嬉しそうにはるは友達に僕を紹介した。どうしようか…。はるの友達は苦笑いしながら僕を見つめる。

「はるは変わってるね。うん、私もこんな子彼氏にしたら、楽かもね」

友達は口をそろえてそう言った。

友達と笑うはるを見て、また遠い距離を知る。彼女にとって僕は必要なのだろうか。

そして、その日の夜方、僕は彼女の涙を初めて見ることになる。

「もう会えないの？ そんなの嫌、この街でできた初めての友達なのに」

日が沈んで人々が家路につくころ、はるは一人僕に会いに来た。

いつものように、スキップしそうな足取りではなく何かに追われてるように焦りながら。

いつものように、鼻歌のような声ではなく、悲鳴のように声をあげながら。

なんとなく分かっていた、いつまでもこの曖昧だけど心地いい、こんな時間が続かないことぐらい。

「ごめんね、ごめん。僕は君のこと…」

「それ以上言わないで、離れられなくなるから」

初めて触れた手は、思ったより小さくて暖かった。傷つけないようにそっと力を込める。

どうか、彼女がずっと幸せでありますように。

「あの子には、悪いことをしたねえ。ずっと通いつめてたんだろ？」

「しかたないさ、まあいい恋だったんじゃないのか、坂口」

すべてが終わってあの街を離れる日、もう会えないと分かっているながら、まだここで話せるんじゃないかと期待している僕が居る。

はると出会った日、満開だった桜は、いつの間にか青々とした若葉色に染められていた。まぎれもない時間の経過。はると過ごした時間の証拠。

「それにしても、お前もずいぶんかわいい子に好かれたもんだな」

「まあ、坂口だもんな。さすが俺が見込んだだけある」

僕の友達が慰めるように頭を撫でる。そしてまもなく、僕は彼らと一緒に車に乗り込んだ。真っ暗闇で、彼らの話す声が聞こえる。

「坂口、かわいそうにな」

「しかたねーよ、その前に何で坂口なんだよ」

「知らねーし」

「いや、紛らわしいんだよ。いくら類人猿だからって、ゴリラに坂口って名前はおかしいだろ」